



夢風船の君、
現実のママン

オーバーリン

1. 夢風船の君

小さい頃、僕は自由に空を飛ぶことができた。別に例え話じゃない。本当に思うがままに、大空を翼もなく飛ぶことができたのだ。夢の中での話だが。それに、なにも空を飛ぶ事だけじゃなくって「気功」を操ることもできて、自在にエネルギー弾を打ち放しまくっていた。そして、これらの能力を駆使して迫りくる悪の軍団と戦っていた。もちろん、夢の中で。

いや、正確に言うならば「夢の中」ではない。夢の世界へと落ちて行く前の「夢への導入」として、そんな想像を遊ばせることを習慣にしていたのだった。そういった物語を作り、自分でその中へ入り込んで遊ぶのだった。僕は夢を見なかった、というか夢を覚えていないタイプの子供だった（今でもそうだけども）ので、布団に入ってから眠るまでの間、自分を作り話の主人公に据えて遊んでいたのだった。

その寝物語は、毎回その場で適当に設定、背景を決めて、その後僕が主人公として入り込んでいくのだった。と言っても、凡庸なガキの思いつく設定などたかが知れており、大抵それはよく遊んだロールプレイングゲームと大好きだった童話をごっちゃにした様な代物だった。ただここで一点特筆しておきたい。僕がその場その場で考え付いた設定、背景、場所、は毎回違っていた、というか「今日は昨日の続き」という様な連続性は持ち合わせていなかったのだが、物語の大元となる世界というのは、僕の認識

の中では同一の世界だった。連作の短編小説とか、オムニバスストーリーの様な感じ、と言えば分かりやすいだろうか。毎夜僕が演じる主人公達は同一の世界の中で、それぞれが別個に共通の「悪」という様なものに立ち向かっていたのだ。つまり、僕はその世界の住人である彼らの中から一人をピックアップし、その人の視点を借りて、その世界を覗き見していたのだ。

その借り物の物語世界の中で、僕が自分に与えた役柄は、決まって主人公であり魔道士か気功士であった。ここで言う主人公というのは、物語を推し進めていく上での「視点」という意味でのそれであり、この一人遊びの性質上、それ以外の選択肢はない。勇者じゃなかったのには、理由がある。僕のイメージでは勇者はあまり上手には魔法を使えず、どちらかというとな剣士の様なタイプが多い（これも自分がプレイしたロールプレイングゲームの影響であろう）。が、僕の間ではどう考えても剣よりも魔法の方が強い様に感じられた。それに、ベッドの中で剣を振り回していると、汗をかいてしまい眠れなくなるし、どうしても「エイヤ」とかなんとか声が出てしまって、母に叱られる。この寝物語の主人公に剣士タイプの勇者は向いていなかった。

主人公である僕の仲間としては、武道家とか剣士とか、そういった肉体派が多かった。で、彼らは最前線で魔物と戦い、僕は後ろから魔法とか気功弾とかを打ち込んで援護する、といったパターンが多かった。話を盛り上げるために、戦士や武道家はよく魔物の犠牲になった。僕は物語のプレイヤーであると同時にオウサーでもあった訳であるから、つまりは自分の仲間を自分で殺していたことになる。その癖に、僕は仲間を失った事への悲しみの涙

を流した、正確にはそうやって悲しむ主人公の役柄を演じ、悦に入っていた。

そして、僕の横には、いつもか弱きヒロインが寄り添っていた。彼女の役柄もいつも同じだった。彼女は何も出来ないくせに、僕を愛するがゆえ僕に付いてきたがる足手まといな女で、僕はいつも彼女を脇に抱えながら敵と戦わなければならなかった。が、魔道士という僕の設定上たいして動く必要もないので、別段邪魔になる事もなく普通に戦っていた。このヒロインはいつも僕に抱きついているという設定なので、リアル感を出すために布団を丸めて彼女に見立て、抱きかかえるというか、僕が抱きつきながら空想遊びをしていた。

この空想遊びをいつから始めたのか、定かではないが、ずいぶん幼い頃だった気がする。五歳とか、その位だろうと思う。子供というのは往々にしてこの種の空想遊びをするものであると思うし、それが精神の成長に役立つ、という一面もあるかもしれない。であるから、五歳位の子供がこの様な空想遊びをする事は取り立てて異常なことではないと思われる。子供は成長の過程で、小学校やらなんやらの「実社会」と触れ合うにつれ自然とそういう空想遊びからは卒業し、そのうちに自分がそういった空想の世界と戯れていた事などは（表面上は）すっかりと忘れ去ってしまう、そういうものなのだろう。

が、僕の場合は少し事情が違った。誰もが自然としたであろう空想の世界との卒業というものを僕はしなかったのだ。空想、ファンタジー好き、とかそういった類のものではなく、文字通りそのままに、僕は己が作り上げた一個の世界から抜け出し、それを切り捨てる事をしなかったのだ。僕の中に生まれたその世界は、時をへてもなお僕の中に存在し続けたのだ。

原因は定かではない。退行や逃避といった類のものでもないのではないかと思われる。僕は現実の世界に順応しきれなかったという事はないのである。僕の今までの人生は、それ程素晴らしい人生だったという訳でもなかったが、それ程悪いものでもなかったのである。両親は健在であるし、いじめにもあわず、友達も多からず少なからず、女にはモテないけれど、それでも女性恐怖症とか女と会話できないとか、それ程の事でもない。まあ、思いつ

く限りではこれといった致命的と思われる様な原因は見当たらないのである。

それにもかかわらず、二十三歳になった現在に至るまでずっと、僕が作り出した一個の空想の世界は、依然として僕の中に存在しているのである。

私事ここに極まれりといった感じで、まったくもって個人的に過ぎる話で申し訳ないのだが、もう少しこの世界について話そうと思う。この空想の世界について書き記すのは初めてのことであるし、何しろ今までこの世界についてしっかりと考えてみた事なんてなかったのだ。この空想の世界はあまりに自然と僕の中にあったものだから。

他人の頭の中を覗いてみた事はないので分からないけれども、僕と同じように自分の中に別の世界を持っている人はいるかもしれない、けれど僕と「同じ」世界を持っている人は恐らくはいないだろう。まあ、そんな事はどうでもいいのだけれども、せっかくだからもう少しこの世界について考えてみたいのだ。

この空想の世界は、幼年期から現在に至るまで（表面上は）全く何の変化もなかった。変わることなく「あった」のである。しかし、宿主であり、この世界を覗く唯一の「視点」である僕は、時が経つにつれて、というか成長に伴って変わった。当然と言えば（言わなくても）当然の事なのであるけれども、これは重要な点だ。僕の方の変化がこの世界にどの様な変化をもたらしたのか。世界自体は何も変わらなかった、のだと思う。

ただ、僕の方で、この世界の利用の仕方が変わったのだ。子供の頃のこの世界は、僕にとっては悪と戦う物語であった。しかし、思春期に入ると物語の趣旨が変わってしまった。先程説明したが、この世界の中では常に、僕の横にはヒロインの女が寄り添っていた。この女について、僕は毎回毎回その場で適当に名前を

付けていた。けれど、毎回毎回僕に適当な名前を付けられていたこの女は、決して「女達」ではなく「女」だった。全て同じ一人の女だったのだ。どんな女なのかを説明すると長くなるのでやめておくが、具体的な女というよりは僕の中での「女的なもの」といった様な、そんな様相であった。

で、僕は空想世界の中で、いつの間にやら「悪との戦い」をそっちのけにして、その世界の趣旨をこの女とのメロドラマにすり替えてしまっていた。最重要課題であったはずの悪との戦いは二人の愛のスパイス程度の役割に成り下がってしまったのだ。いつの間に物語の趣旨がすり替わってしまったのか、定かではないが、十四、五の頃には既にそうなっていたような気がする。

こうして僕は毎夜毎夜、空想の世界のヒロインである彼女と熱烈に愛を交わし続けた。そうしている間、現実の世界の方に取り残された僕の身体は、枕を縦向きにして乳房に見立ててはそれを吸い、丸めた布団に抱きついて股間を擦り付け続けていた事になる。我ながら惨めなこと極まりないと思う。チョコっと可愛い女の子に

「虚しくないの？」

なんて聞かれたら、

「そりゃあ、虚しいに決まってるさ。」

と答えるしかないだろう。でも事実、虚しいにもかかわらず、僕はオナニーを覚えてまるで猿のように己が竿をしごき始めた時から今に至るまでずっと、片や空想の世界で彼女を愛し、片や現実の自分の汗の匂いが沁み付いた汚らしい布団とまぐあい続けてきたのだ。そうでもしなければ、虚しさの余りに気が狂ってしまい

そうだったから。

これだけ話したのだから、僕の空想の世界とそこにいる彼女について少しは分かってもらえただろうか。まあ、いいか。話を現実に戻そう。その日、僕が一人暮らしをしている自宅のアパートに帰ったのは午後9時過ぎだった。定時の午後5時に研究室を出てから4時間余りの間、自分が何をしていたのか、全く覚えていなかった。何故だか分からないけれど、非常に疲れていたし、非常に苛々としていた。とにかくロクな一日じゃなかった。それだけははっきりとしていた。まあ、いつもの事であるが。

と、書いてはみたが、実際のところその日僕がムカついていた理由ははっきりとしている。数日前、二年近く前に手痛くフラれた女から結婚式の招待メールが送られてきたのだ。その女の結婚相手は僕がフラれた直後にその女と付き合いだした男だという事だった。その男というのが一から十までいけ好かない男で、多少顔格好が良いからといってそれを鼻にかけている様な奴で、その癖に一見してその事を表に出さない様なていで善良ぶっていやがる、という糞男であった。あの野郎、わざと俺の前でイチャつくところを見せつけやがって、二人して見下した眼で僕の事を蔑みやがって。あの日から二年間ずっと、「二人揃って地獄に堕ちやがれ」と呪い続けていたのに、結婚とはな。その上にこの僕に結婚式に来てくださいだと？思いあがるのもたいがいにしる。フラれた日、貴様は僕に「お友達でいましょう。」とかぬかしやがったけどな、僕は今日にいたるまで一度もそれを了承した事はないんだ。友達なんかではないから結婚式に行って「おめでとう」

と祝福する気もないし、お祝儀を払ってやる義理もないんだ。学生結婚だから式を挙げるのも大変かもしれないけれどな、僕を呼ばないでそっとしておく、それ位の気遣いくらいはあってもいいんじゃないのかな。それは幸せになる二人が最低限わきまえるべき事だ、と思うけれどな。

まあけど、こんな事を思うのは僕だけかもしれない。今言った様な事を他の友達、ではないな、知り合いだな、知り合いに滔々と話して聞かせてやったら、とんでもない嫌そうな顔していたよ。非難がましい眼で睨んできやがったよ。「空気読めよ」みたいな感じでね。全く、糞喰らえだよ。読んで堪るかってんだ。ということだよ、良かったな、皆君達の味方だよ。薄ら偽善者達ばかりなものな。

という様な呪詛の気持ちがどんと内湧き上がってきて、それでその数日の間、僕は無性に苛々としていたのだった。それだけならまだ良かったのだ。まあ、良くはないのだけれど。

その上にこの日の前日、僕はそれとはまた別の女にフラれたばかりだったのだ。こちらの女も僕からすればずいぶんと思わせぶりな女で、僕が誘うがままに何の躊躇もなく僕の家に入り込んで、身体を擦り寄せて甘えてきた癖に、いざ僕が告白してみれば

「そんなつもりじゃなかったんです。お友達でいましょう。」だとかほざきやがる。どいつもこいつもお友達、お友達って言いやがって。そう言っておけば無難に断れると思ってんだらうけどさ。いい加減に聞き厭きたわ。もう、こうなってみればどうでもいいんだけれどな。ああ、本当にどうでもいいけれどな。

この様に、不幸が二つ重なり、その日僕は些かのパニックに陥っていたのだ。正確に数えた訳ではないが、僕はこの女で8回程は連続でフラれた事になるのだった。こうなってくるとフラれる事はもはや日常の些事と化してくる。それ程のショックも受けない。

「ああ、またか」

と、まあ多少落ち込みはするがその程度で、その事そのものの落胆よりも、それ（失敗）が繰り返されることにウンザリとした感の方が強い。

その日、僕が家に帰った時もそんな感じであった。苛々としながらも、こんな日常にウンザリという倦怠感が鬱積としている。それが疲労となって両肩にのしかかり、凝り固まっているのだ。僕は自分の冴えない日常の連続性と停滞に、心底ウンザリとしていたのだ。ウンコまみれのザリガニ、まさに最悪である。

明かりも点けずにベッドに倒れ込む。鈍痛の溜まっていた腰が伸びて心地よい。ベッド、非常に素晴らしい響きだ。そこはもう僕だけの領域。空想の世界の入り口。もういい、現実には知らない、どうにでもなっちまえ。俺は今から彼女と愛し合うから、それでいいのだ。いなくてもいいんだ。毎晩毎晩、眠れば君に会えるんだもの、ニコニコ顔の君に。今日一日、目一杯のウンザリを僕は味わい、そして乗り切ったのだ。だから明日になるまで、朝までは現実とおさらばだ。君と甘ったるくじゃれ合うんだ、甘ったるく。そうだ、今日の君の名前はシュガーにしよう。それがいい、いい名前だろう？君もそう思うだろう？

そんな事を考えながら、僕はすぐにまどろみ、眼を瞑り、風船を膨らませるのと同じ様に、その日の夢を想起し、膨らませ、その中へと堕ちていった。

パチン！！

確かにそう聞こえた。普段、僕は極度に寝覚めが悪いのだが、何故かこの時はそのパチンという音で途端に眼が覚めた。

布団も枕もなかった。

そして、君がいた。

毎夜毎夜、僕が夢みて、恋い焦がれ、待ち望んでいた君が、スヤスヤと静かな寝息をたてて、僕のすぐ脇に横たわり、寝入っていたのだ。汚らしいアパートの些か窮屈なシングルベットに、僕と君で二人、しっかりとそこにいたのだ。

僕は即座に全てを理解した。確信したのだ。つまり・・・、あれだ。入れ替わったのだ。逆転したのだ、夢と現実が。

僕は狂喜した。遂に、ついにだ。終にかもしれない。それだっていい。どうだっていい。勝った。僕は勝ったのだ。今までさんざっぱら僕を蔑み、馬鹿にしてきた糞共を出し抜いてやった。文字通り、夢を現実のものにしたのだ。何故なら、彼女は僕を愛している。僕なしでは生きていけない、僕に頼りっぱなしの、可愛い僕のシュガー。何故なら、君は僕が創りだしたからだ。今まで君は幻だった。僕の虚しさに過ぎなかった。でも今はもう、こうしてここにいる。勝ったからだ。勝ったのだ、僕の思いが、僕の切望が勝利したのだ。ざまあ。ざまあだぜ！

止め処なく湧きあがる多幸福感、僕は絶頂にも似た刺激、興奮を

覚え、身悶えした。ああ、胸が苦しい、ギョングョンする。まるで恋の様だ。いや、何を言っているんだ、これは恋だ。恋の勝利、恋の結実だ。あはあ、生きていて良かった、生まれてきて良かった。お母さん、いや、ママン！僕を生んでくれてありがとう。

が、ふと我に帰り、僕は君を見やる。君は相変わらず、スヤスヤと寝入っている。君の事を暫くじっと見据えた末、僕は意を決し、恐る恐る震える手を伸ばす。そして、人差し指の先で君の頬をツンッと突いてみる。

「んんっ」

君は小さく呻き、そしてゆっくりと眼を開く。息を呑んで見守る僕、君はキョトンと何処ともつかない何処かの中空を見やり、やがてゆっくりと僕を見た。そのパッチリと大きくて、真っ黒なつぶらな瞳で。僕は再び歓喜、身悶えた。

恥ずかしくて、居た堪れなくて、真っ直ぐに君を見れない。でも、それでは何にも始まらないのだから、そんな事は分かっているのだから、頑張っ、て、勇気を振り絞っ、て、君を見る。

君は、じっと、僕を見つめている。その視線は揺るがない。僕も君を見ている。心臓が、おかしいことになっている。のどがカラカラだ。

「おはよう。」

そう、何とか絞り出した、擦れた声で。

「おはよう。」

君もそう言って、ニコツとした。そして、また僕を見ている。おはよう、と君が喋った。それだけ、それだけだ。なのに。だのに。素晴らしい。素晴らしすぎる。

僕は君のおはように何の言葉も返せなくて、ただ喉が詰まってヒクヒクと痙攣するだけで。そのせいで、沈黙が流れ始めている。沈黙。沈黙。と、君がはにかんだ。

ああ。ああ、沈黙。一向に構わないじゃないか。沈黙、何て素晴らしい！！全てが思い通り、全てがそのまま、夢に見たままだ。はは、それはそのはずだ。君は夢、夢の世界から来た僕のヒロインなんだから。ああ、もう。言葉なんてまどろっこしい。そんなもの、塵程も役に立ちやしないよ。

ジリリリリリリリイイインン！！

突然にけたたましく鳴り響いた目覚ましに、君はビクンツとして、僕も些かではあるがビククリした。急に現実に戻されて、騒ぎ立てる目覚ましのスイッチをオフにして、それを見遣る。と、もう8時30分である。研究室の出勤時間は9時であるから、あと30分しかない。せつかく巡り会えた君と一旦ではあるにせよあと30分でお別れしなければならない。忌々しき事態である。あつてはならない事である。

僕は瞬時に判断し、鞆からノートパソコンを取り出し、電源を入れる。

「ねえ、それなあに？」

軌道を待つ間に、君が話しかけてきた。

「ああ、これはね、ノートパソコンっていうんだよ。」

僕は猫撫で声で答える。

「ノートパソコンってなに？」

「そっか、そうだよね、君は知らないよね。これを使ってね、僕は今から僕の先生に手紙を送るんだよ。まあ、魔法みたいなものかな。」

そう言いながらも、ネットに接続してメールの文面を打ち込む。

「ふーん。じゃあ、さっきのうるさいのはなあに？」

「・・・、本日は激しい嘔吐と腹痛により欠席します、っとこれによし。えーっとね、あれは目覚まし時計って言って、その名の通り決まった時間に起こしてくれる機械だよ。」

「ふーん、機械ってなあに？」

と、この様に彼女のなあになあにはその後も延々と続いた。始めの小一時間は僕も優しく丁寧に教えてあげていた。彼女と話せる事が嬉しかったし、何にも知らない彼女が可愛くてたまらなかったからだ。しかし、段々と僕はそれどころではなくなってしまった。決して面倒になったとかそういう事ではない。

どういう事かという、まあ、簡単に説明すれば、つまるところ、彼女はスツポンポンだったのだ。彼女が笑うとその形の良い柔らかそうな乳房がプルンプルンと揺れて、僕は眼のやり場に困り、それでもしっかりと凝視してしまい、もうその乳房にムシャブリつきたいという欲求を制御する事に必死で、なあになあにどころではなくなってしまうでいたのだ。

それでも、彼女のなあになあには一向に止まる気配を見せず、僕は悶々の余りに息が上がり、鼻息も荒く、ハアハア、ゼエゼエ、意識も朦朧としてきた。

「ねえ、これはなあに？」

と、彼女が屈託の無い笑顔で指をさす。

「えーっとねえ、ハア、どれどれ、ハアハア、それはだね・・・、」

彼女の指さす先を見やり、突如言葉に詰まり、思考が停止した。

彼女の指は僕の股間を指していた。正確には硬直し起立した為に、パンツの小便口から飛び出しているそれを指さしていたのだが。

「・・・、えっとねえ。」

僕は彼女を見て、その表情を伺おうとする。そもそも、彼女は僕

が生み出した夢、それゆえに僕の望むがままに出来上がっているはずである。事実、僕と彼女は何年間も毎夜毎夜、飽きる事もなくまぐわいを重ねてきたじゃないか、夢の中で。そして、夢の中で彼女は、そういった男女の感情の機微とかそういったものをわきまえた、つまるところはエッチが大好きな女の子だったじゃないか。

そう思い、僕は彼女の視線、表情からそういった「色」めき立つ何かを読み取ろうとしたのだった。がしかし、僕をじっと見つめる彼女の瞳には一切の感情も読み取る事は出来なかった。無垢そのもの、と言えばそうなのだろうけれど、僕にはそれがまるで「無」である様にしか思われなかった。

おかしい。全然おかしいぞ。こんなじゃない。こんなのは結実でも何でもない。こんなママゴトが様な「なあにあなに」が愛の結実であってたまるかよ。何だったんだよ、一体。今までの俺は、今までの俺の夢は、惨めさは、一体なんだったのかよ。こんな塵屑みたいなものの為に、今までの俺の……。馬鹿みたいじゃんかよ。馬鹿じゃんかよ、俺。結局はタダの馬鹿だったのかよ俺は。そんな事は痛いほど分かってたけどさあ。嫌っていう程思い知らされ続けてきたけどさあ。だからこそ、それゆえの夢であり愛なんじゃなかったのかよ。何なんだよ。

僕の中に急速に渦巻きだしたどす黒い、どす黒い、悶々。これもまた、先程の子供騙しの愛情もどきと同じように、僕が言葉を産み出す事を拒んだ。

「ねえ、これなあに？」

相も変わらずの純真な君の問いに、渦巻いていた黒い悶々が急沸

した。

衝動に身を任せ、ベッドに腰かけていた君に伸しかかり、押し倒した。

「あっ！」

君は短い悲鳴を上げ、汚い僕は君の汚れ無き乳房に食いつき、無我夢中に吸い上げる。

「・・・ねえ、何してるの？」

君は自分が何をされているのかも理解できず、心配そうに小さな声で尋ねる。獣のように急変した僕の荒々しい情動に気押しされ、脅えているようだ。

「・・・。」

僕は彼女の問いには答えず、憑かれたように彼女の肉体を弄る。そうしながら、一人昂ぶっていく。グルグルグルグル、螺旋階段を昇りつめていく。君を置き去りにして。やっぱり僕は一人ぼっちなのだ。

昂ぶりも最高潮に近づいている。さあ、達成してやろうじゃないか。結実させてやろうじゃないか、僕の思いを、夢を。それがどんなに陳腐なものであっても、独りよがりであっても。もう、ここまで来たら後には退けないんだ。尽き、果てるしかない。そもそも話、選択肢なんてものは、無いんだ、一本道だろう。ああ、笑え、笑えよ。笑えばいいさ。俺も笑ってやるよ、こんな僕自身を。

僕は君の両足首を掴み、押し広げる。そこには、何があるか、

君は知らないんだろう？

そこには・・・。

そこにあったのはシリコンで出来た玩具だった。君のそこには男が自慰をするためのオナホールが埋め込まれていた。僕はそれを見て、君を見た。君は相変わらず何も分からないという顔をしていた。表情なんてなかった。

僕は気付いた。僕は、気付かないふりをしていたのをやめた。始めから分かっていた事を認めた。逃避を諦めた。

「馬鹿だよな、本当に。」

僕は、君にニツコリと笑いかけてやった。

「なにが？」

君は本当に不思議そうに、また分からないという顔をした。

「さよなら。」

僕は最後に君にそう言って、君を抱きしめ、背中の突起に手を掛けた。

その瞬間、君はビクンと震えてもがこうとした。しかし、君は力無くて、それは抵抗にはならなかった。君は初めて全てを覚ったのだった。

「あっ、やめて！！」

君がそう叫んだ時にはもう遅かった。全てが終わっていた。

ツプシュウー――。

「アア・・・。」

君は漏れ吐くようにそう言って、萎んでいった。君の可愛かった乳房もクタンとなって、ペラペラになってしまった。

暫くすると、ダッチワイフの君は空気が全部抜けてペツタンコになってしまった。僕は君を小さく畳んで、君が最初に入っていた箱に詰め込んで、蓋をした。そして、その箱を押し入れの中に放り込んだ。

2. 現実のママン

君はいなくなってしまった。萎んで、畳まれて、押し入れの中に放り込まれて、永遠になくなってしまった。だって僕はもう二度とあんな惨めな思いはしたくないから、もう二度と君を押し入れから取り出して膨らます事はないだろうから。幼い頃からずっと僕と共にあった空想の世界、「夢風船」はあっけなく萎み、無いものになってしまった。僕はあの世界に愛着を感じていたので、苛立ち取り乱していた気分が収まってくると、無くなってしまったことはやっぱり悲しく、寂しく感じられた。

部屋に一人ぼっち、取り残された僕は寂しくて仕方がなくって、そんな気分を紛らわすためにちゃぶ台の上に転がっていた煙草の箱をとって、そのくしゃくしゃになった煙草の箱から一本取り出して火を点けた。

すぐに吸い終わってしまったので、もう一本取り出して吸った。それもすぐに吸い終わって、三本目を吸い始めたら、煙が効いて、胃の奥の方が引き攣る様になって嗚咽した。しょっぱい唾が口の中に広がって、涙が出てくる。中学生の頃から吸い続けている煙草だけれど、最近は軀の方がこんな風に拒絶反応を示すことが多くなった。徹夜明けとか、体調の悪い時は特にそうなることが多い。でも僕はこの嗚咽が嫌いな訳じゃない。苦しくって涙が出てくる時「ああ、僕は生きているんだな」と感じて少し嬉しくなる。日常の生活の中で自分を実感できる事なんて滅多にないも

のだから、この煙草による嗚咽は貴重な機会だと僕は思っている。だからどうだという様なことでもないのだけれど、そうなのだ。

煙草を吸い終わって何もすることが無くなったので、僕は眠ることにした。もう夢は見ないんだろうなと思った。寂しくはあったけれど、不思議と悲しくはなくて、それは何も感じていない状態に等しい様に感じられた。普段僕は寝つきが悪く、眠れないまま朝を迎えることがざらにあるのだが、何故かこの時はずっと眠りに落ちた。そして眠る前の予想に反して、僕は夢を見た。

目を開けると僕の横に初恋の女の子がいて、僕を見ていた。十歳の時に好きだった同級生の女の子。でもそこにいる僕は今の僕で、つまりは二十三歳の僕で、その子も僕と同じ歳だった。その子とは小学校を卒業してからは会っていなかったから、僕の隣に横たわっているというのは現実的には脈絡のないことだった。だから僕は「ああ、これは夢なんだな」と思いながら僕を見ているその子の瞳を眺めていた。

暫くそのまま見つめ合っていて、その子が何も話しかけてこないで、僕は

「久しぶりだね」

と声をかけてみた。その子は薄らと微笑んで

「うん」

とそれだけ言った。

久しぶりに見るその子はすっかり大人になっていて、でもその子だと分かるその子の性質というか、たたずまいの様な所はその当時のその子のままで、僕は懐かしい気持ちになった。感情の起伏が少なくっていつも静かに微笑んでいる様な、それでいて薄幸そうな、少し哀しそうな、僕はその子のそういう雰囲気が好きだった。横にいる大人になったその子にも、当時のそんな感じがそのまま残っていて、というよりはその性質が時の経過によって行きつくべき所に辿り着いた感があった。簡潔に言えば、薄幸という要素が臨界点に達しているのだった。「この子はもう、生きていないのかもしれない」その時僕はそう思った。

「最近、どうしてるの？」

「そうしてるって、どうもしてないよ」

「どうもしてないって、何かはしてるでしょ？」

「そうね、うーん・・・、一人暮らしを始めたの」

その子は少し考えるようにしてからそう答えた。

「働いてるの？」

その子が高校を出てから大学には行かなかったということを風の噂で聞いていたので、僕はそう聞いてみた。

「ううん、働いてない。一日中家で一人でボーっとしてる。」

「付き合ってる人はいないの？」

夢なのに何を聞いてるんだろうと思いながらも、僕は気になってそう質問した。

「いるよ。」

「その彼氏は会いに来ないの？」

「最近会ってない。」

「あんまり上手く行ってないの？」

僕の問いにその子はしばらく考え込むようにしていたので、僕はまずい事を聞いてしまったのかなと思って少し後悔した。

「私、妊娠してるの。」

その子はポツンとそう言った。深刻そうな感じではなくって、さらっとした感じの言い方だった。

「墮せって言われたら嫌だし・・・」

僕は胸が痛みながらも「夢なのになんでこんなこと言うんだろう」と思った。

「そうなんだ・・・」

僕は夢でまで全く気のきいたことを言えない自分に呆れてしまった。

「僕さ、小学生の時、君のことが好きだったんだ。」

会話に脈絡がないという点が夢の大きな特徴の一つではあるが、それにしてもこれはヒドイものであるが、夢の中にいる僕はそんなことはつゆとも思わずにそうのたまった。

「知ってたよ・・・」

その子は悪戯っぽい笑みを浮かべてそう言い、僕達は親密な空気に包まれた。夢とは非常に都合のいい代物で、そこに悲愴というものはない。僕は心弾み、嬉しくなって、はしゃいだ気分になって、その子の手を握った。

「へへ」

僕がはにかめば

「ウフフ」

その子もじゃれる。幸せそのものだ。

目覚めた僕が覚えていたのはその部分までである。土曜日の朝、当然横に初恋の君がいるはずもなく酷く陰鬱な朝である。昨日のダッチワイフに続き今日は初恋の女の子、散々っぱらである。夢で甘々な妄想に浸れば浸る程、荒涼とした現実が浮き彫りになる。そんなことは自明の理であって、それだから普段僕はなるべく優美な妄想をしないように心がけている。淡々と日々をこなすだけの生活に終始しようと努めている。惨めったらしいのは嫌なのである。その努力も虚しくこの有様である。

ベッドから這い出して携帯を開き、煙草に火をつける。午後一時五十分、せつかくの休日も半分終わってしまっている。煙草も今のが最後であった。買いに行かないとな。

そんな事をだらだらと考えながら再び携帯に目を落とすと、ディスプレイには5/10という文字が表示されている。

「あ、今日十日じゃん。給料日だ。」

今まで陰鬱極まりない気分だったことも忘れ、俄に浮き浮きとした気分になる。

「おしっ。」

そそくさと風呂に入り、髭をそり爪を切り、押し入れから清潔な服を引きずり出す。その際、「ラブドール みゆき」と書かれた箱が視界の端にちらと映ったが見なかったことにする。フンフン、鼻歌交じりで着替え、埃の被った鏡で見栄えをチェックする。バッチリである。

「よし、俺はカッコいい。カッコいいぞお！」

そう口に出し、自分に言い聞かせ、気合を入れる。最後に高校生の時から愛用しているバーバリーの香水を吹きかけて家を飛び出す。

雲一つない真っ青な空、快晴である。

「今日はいいい日だ。」

そう思う。

小さく古びたブラウン管テレビ。画面の向こうではお笑い芸人が自分の失敗談を大声で面白おかしく捲し立てている。僕が座っているソファの隣の席では腹が出て禿げたおっさんがエロ本のページをめくっている。戦いに備えて気分を集中させているのであろう。僕は待合室で雑誌を見る派ではないので爪が綺麗に整っているかどうか確認し、左手の人差し指が少しひび割れていたののでテーブルにおいてあるヤスリを手にとって入念に磨き始める。爪を完璧に仕上げ、することが無くなったのでポケットから煙草を取り出して吸い始める。

家を出た時は至極幸せな気分であったが、ここにきて負の感情が入り混じり始めている。思えば毎月毎月給料日の度にここのお世話になるのが恒例の様になってきているが、本当にこのままで良いのであろうか、良いはずがない、ここに来ることは問題の解決には一切つながらない、その場凌ぎに過ぎず問題をズルズルと先延ばしにしているだけである。と、そんな思いである。

「鈴木様。鈴木様あっ！大変お待たせいたしました。」
いつもの如くにそんな事を考えているうちに黒服に声をかけられたので、あわてて煙草を揉み消しておずおずと黒服の後について待合室を出る。

「どうぞこちらになります」
促されるままに店の奥に通される。

「本日お相手の女の子、アキちゃんです。どうぞごゆっくり。」
黒服が部屋に通じる扉を開ける。扉の向こうにはアキちゃんがニ

ツコリと笑って立っている。

「コンニチワー。ヨロシク。」

外国人特有のアクセントの日本語で「アキちゃん」なる嘗ては女の子であった女の人が僕に挨拶をする。

「こんにちは」

委縮した小さな声で挨拶を返す僕の手をとって、アキちゃんが部屋に案内してくれる。

「こっちタよ。」

アキちゃんに手を引かれ、狭い通路を抜けて「部屋」に入る。「部屋」と言うのは名ばかりで、僕の背丈よりも少し高いだけの壁で仕切られた「空間」である。二、三畳の広さでど真ん中に敷布団が敷かれているだけ、それ以外は何もない「部屋」。さっき通った通路もこの「部屋」も薄暗く、紫の照明が怪しい。90年代のJ-POPがけたたましく鳴り響いており、五月蠅い。

「服、脱いテ。」

振り向いたアキちゃんがニツコリと笑ってそう言う。アキちゃん自身は僕にそういった傍からもう脱ぎ始めている。と言っても下着と簡単な寝間着の様なものしか着ていないのであつという間に裸になってしまう。僕の方は少しオロオロしながらシャツを脱ぎ、ベルトを外し、と手間取っている。この唐突感、部屋に来ていきなり服を脱ぎ始める感じ、はどこの店も殆ど共通であり、何回来ても慣れることがない。それはヤリに来ているのだから服を脱ぐのは当たり前なのだが、それにしてもなんか、こう、もうちょっと「間」みたいなのがあってもいいんじゃないか、と思う。ひどく「効率的」なのである。まあ、文句を言っても仕方がある

まい。ここにおいて僕ら「客」は文句を言えるような立場にないのだろう、他にどうする術もない人間達なのだろうから。

そんな事をグチグチと考えながらも何とか脱ぎ終わり、「脱いだよ。」

と、アキちゃんに報告する。

「あっ、オケ。」

積まれたタオルをガサゴソとやっていたアキちゃんが手を止めて僕に向き直る。初めてアキちゃんの顔をじっくりと見る。少し歳は言っているけれど、昔は結構可愛かったのだろう。今でも十分綺麗だ。今日は「当たり」だな、と心の中で思う。この前は動物園から脱走してきたのではなかろうかと思われる様な相手だったからな。

今からこの女の人とヤルのだ。そう思うとなんだかドキドキとしてきて、顔が少しニヤけてしまう。

「どしたの、恥ツかしイ？」

「うん、ちょっと。」

アキちゃんは人の表情を読み取る気力の残っているタイプの風俗嬢らしい、珍しいことだ。

「ニイチャン、カワイイねえ。」

アキちゃんはそう言ってニッコリして、僕の頭に両手を掛ける。その手に引き寄せられて僕はアキちゃんとキッスする。目を閉じて、唇に感覚を集中させる。柔らかく、湿っている。舌が僕の口の中に入ってくる。その舌を吸い、アキちゃんの腰を抱く。

けたたましく鳴り響いていたJ-POPの曲が鳴り止み、静かになる。と、

隣の部屋からだろうか、女の喘ぎ声が聞こえてくる。

「アッ、アアッ、アアアアーン。」

傍で聞いていてもワザと臭いと感じる程の仰々しい喘ぎ声だ。大音量のBGMは目隠しならぬ耳隠しの役をしていたのだと気付く。

一しきりアキちゃんの唇を吸い終わったので顔を離す。

「ツアン。」

アキちゃんはいやらしい吐息を吐いてから上目づかいで僕を見る。サービス満点である。

「お風呂イコ。」

アキちゃんはそう言うのと脇にうっちゃってあったタオルを拾い上げて準備を始める。

「ハイ、タオルつけて。」

そう言って僕にバスタオルを手渡す。僕はオズオズとそれを腰に巻く。

「お風呂ハイリマース。」

ガララ、と勢いよく部屋を仕切っていたロールカーテンを開け放ち、アキちゃんはそう大声で叫んだ。スタスタと「お風呂」に向かうアキちゃんを追って、僕も廊下に出る。と、廊下にはアキちゃんとは別の女の人が全裸でフラフラとしている。全裸のくせに至極普通のというか、平然とした表情をしている。僕は極力その女性を見ないように努めながら、それでもチラ見しながら、シャワールームに向かった。

「ニイチャン若いネ、イクツ？」

シャワールームと言っても半畳程しかなく、人が二人入ればもう足の踏み場もない様な本当に狭い空間で、僕は仁王立ちにされて、アキちゃんは僕の股間を非常に丁寧に洗ってくれている。

「23だよ。」

「オオ、本当に若いネ、ワタシ29だよ。」

この店の客層は僕よりも年上の客が多いのだろう。それは待合室にいる他の客を見ていれば何となく分かる。僕のように学生の分際でこんなお店に入り浸っている様な若者は珍しいのだろう。そう思うと自分が酷くみっともない様に感じられて、まあ実際にみっともないのだろうが、恥ずかしく惨めな気分になった。が、そんな風に落ち込んだ気分とは裏腹に、アキちゃんが丁寧に洗っているその刺激によって僕の下半身は非常に元気になり、いきり立っている。

「若いカラ、ココも元気ネ。」

そう言ってアキちゃんはニコニコしながら僕をあそこをゴシゴシとしごく。

「アアッ、くすぐったいヨ。」

情けない声を上げて、堪らず僕は身体をのけ反らせる。

「ウフフ。」

笑いながら、アキちゃんはシャワーで僕の身体を洗い流し始める。腹側を洗い終えたので僕は回転し、背側を洗うのに協力する。

洗体の次はうがいである。アキちゃんがコップにうがい液を入

れてシャワーのお湯で薄め、僕に手渡す。

「ハイ。」

「ウン。」

僕は手渡されたうがい液を口に含み、丁寧に口を濯ぎ、ペツと吐き出す。二回でうがい液が無くなったので、アキちゃんにコップを手渡す。僕はこのうがいの工程を極力丁寧に行う様になっている。いくら仕事とはいえやはり見ず知らずの男にベロベロとされるのはあまり気持ちのいいものではないのだろうな、と申し訳なく思う気持ちがどこかにあって、せめてもの償いというか、そういう気持ちで口を丁寧に洗う様になっているのである。

「ニイチャンの大きいネ。」

僕の硬直したモノをオシャブリしてくれていたアキちゃんが口を離してそう言う。

「そんな事ないよ、普通だよ。」

僕は「またか」と思いながらも、恥ずかしそうな素振りでそう答える。

「ううん、大きい。」

「そっか、ありがと。」

今、「またか」と書いたが、この大きい、大きくないの問答はこの手の店では例外なく毎回の出来事なのである。恐らくは店側が客を喜ばせる為に「そう言え」と指導しているのだろうが、この台詞は多くの客にとって逆効果なのではないだろうかと思う。僕の場合にしたって、自分のものが並もしくはそれ以下であるこ

とは自分自身が一番良く分かっている。銭湯に行ったりすれば一発で分かるのだ。それなのに頑なに「大きい」と主張されても戸惑うばかりなのである。ただ言い合っても仕方がないので、彼女達の気持だけはありがたく頂戴して「ありがとう」と言う様にはしている。

が、ここまで考えてハツとする。彼女たちにとって、それは一様に大きく、忌避すべきものなのではないだろうか、という事に思い至ったのである。彼女達は一日に何人もの客を相手にする。その分アソコを酷使う訳だから、摩擦で炎症を起こす事もざらにあるだろう。そんな状態で次の客のモノを受け入れなければならないとしたら、痛くて堪らないに違いないだろう。そんな時、客のそれは「痛みを与えるモノ」に他ならない。そんなこんなが繰り返されてきたからこそ、彼女たちにとって客のそれは「大きい（痛い）」という事になったのではないだろうか。

そんな妄想をしてしまったが為に、僕はますます自分が惨めだったらしく感じられ、アキちゃんに申し訳ない気持ちになった。ただ、そんな気持ちになればなる程、僕のやる瀬無さは昂ぶりに転化していく。

悶々悶々としながら、僕は必死にアキちゃんの乳房にむしゃぶりつく。時の洗礼戦い、重力に抗い続けてきたアキちゃんの乳房はとても柔らかい。妙齡の女性の乳房は、若い女のそれと比べて柔らかく、揉むとどこまでも食い込んでいくような感覚があると思う。若い女の乳房は硬くてパンパンとしていると思う。僕は、僕は柔らかくて優しいおっばいの方が好きだ。

「アアン、ニイチャン上手だね。」

アキちゃんが喘ぎ声を上げながら僕を褒めてくれる。僕は「見え透いた嘘をつきやがって、その喘ぎ声だってどうせ演技だろうが」と思い、そう思うと僕の中で凶暴な気持ちが芽生えてくる。けれど、その気持ちを押しえこみ、乳房から口を離し、アキちゃんの唇を吸う。そんな風に後ろ向きに考えても、何も生まれてきやしないのだ。どうしようもないのだ。それは前向きが良いとかそういう意味ではなく、こうする他に致し方ないという点においてだ。

演技だろうと何だろうとアキちゃんはアキちゃんのすべきことをして、僕はそんな彼女を金で買っている。そして今、この「今」という時間に共に居合わせた。ただその事実があるだけで、そこに僕の感情が入り込む余地なんてないのだ。申し訳なさ？罪悪感？僕にはそんな甘ったれた事を感じる資格なんてないのだ。今ここでこうしている時点で。僕はアキちゃんに貪り付く汚れた獣以外の何物でもないのだ。僕は卑しい買魂奴になりきるしかない。

「ニイチャン、入れル？」

アキちゃんが潤んだ目で僕を見て言った。

「うん。」

アキちゃんに導かれ、僕は彼女の中に入る。温かい。生きている人間の体温が温かいということ、僕はこんなやり方でしかその事を確認できない。

「アア、ニイチャン。」

アキちゃんは呻く。僕はゆっくりと腰を動かし始める。アキちゃんも僕の動きに合わせて腰を動かす。段々とその速度が増して

いく。それに合わせて、アキちゃんの喘ぎ声は大きく、間隔が短くなっていく。

「ニイチャン、ニイチャン。」

僕も段々と高まっていく。アキちゃんの中に入っている僕の「部分」に僕の感覚は集約され、僕はその「部分」だけになっていく。

僕は今セックスをしている、アキちゃんという年上の女と。見ず知らずの女を買って、セックスしている。ただ、それだけ。それだけが紛れもない事実だ。現実の世界で、愛も恋も何もなく、セックスをしている。夢の世界にあったものは何もない。

この現実の世界に、君はいない。あるいは命の無いビニール人形でしかない。それは悲しい事だ。でも僕は今、間違いなく現実の世界に存在していて、それは変えられない事だ。

僕は今、犬畜生よりも卑しい存在になって、生きた女を穢している。そうすることで、やっと自分を確認している。問題なのは、その女が活着ているという事だ。君と違って、活着ているという事だ。そして、僕も活着ている。その事も問題なんだ。

堪らない。本当に堪らないよ。

でもさ、君にはそんなに嘆かないでいて欲しい。全てが終わった訳じゃない。全てが駄目になってしまった訳じゃない。僕はまだ抜け殻じゃない。僕にはまだ衝動がある、悔しいって思えるしさ。僕は現実の世界に踏み止まって、もうひと足掻きしてみるつもりだからさ。押し入れの奥なんて悲しすぎるから、夢の世界へお帰りよ。夢の世界から僕を見守っていておくれ。

「ありがとうございます、またのお越しをお待ちしております。」

黒服に見送られて、僕は店を出た。ずっと暗い中にいたせいで日

の光がまぶしく、僕は目を細めて外を見遣る。道には人々が往来している。サラリーマン風、OL風、若い女、ヤンキー、おっさん、おばさん、色々いるがその誰もが皆、紛れもなく生きている。

「糞ったれが。」

僕は小さく呟いて歩き出し、それら生きている人間達の中に紛れ込む。歩きながら煙草に火を点けて、思い切り吸いこむ。苦い煙の味がする、悪くない。ふと赤い看板が目について、そこには「路上喫煙禁止区域」と大きく書かれてある。目の前には交番があって中にいる警官が僕を睨んでいる、気がした。

「糞ったれ・・・。」

僕はまたそう呟いて、仕方なく靴の裏で吸い始めたばかりの煙草を揉み消し、吸い殻を煙草の箱の中にしまった。もちろん、ポイ捨ては禁止なのだから。吸い殻入りの煙草の箱をポケットにしまい、僕は再び歩き出した。

夢風船の君、現実のママン

<http://p.booklog.jp/book/28399>

著者：オパーリン

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/opaarinn/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/28399>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/28399>